



ヘンリー・ジェイムズと視覚芸術

—The Wings of the Dove の場合—

山口 志のぶ

[キーワード：① ジェイムズと視覚芸術との関係 ② 象徴 ③ 対比
④ 連関する絵画による暗喩 ⑤ 入れ子構造とテキスト解釈]

序

Henry James の作品を一読すると、実に数多くの絵画や彫刻あるいは著名な画家や彫刻家の名前がテキストに織り込まれていることに驚かされる。小説家がそれらを登場人物の運命やある状況を示唆する象徴として用いることは、言うまでもなくごく基本的な技法の一つである。しかしながら、ジェイムズはそれらを表層レベルで使用することはなかった。彼は視覚芸術を物語の主題や展開に深く関与させたのである。その点が他の作家とジェイムズとの違いである。また、彼はそれを可能とするに十分な視覚芸術に関する知識を持っていた。

この問題に関して言えば、すでに1944年には F.O. Matthiessen がジェイムズ作品における造形美術の果たす役割の重要性について指摘している¹⁾。それにもかかわらず、この分野に関する研究は長らく未開拓のままであった。例えば、Leon Edel による伝記的研究や Frederic Crews による異文化衝突から生じる悲劇についての考察、Oscar Cargill を代表とする小説の源泉研究に焦点をあてた実証的アプローチ、あるいは Percy Lubbock や J. W. Beach らによる小説技法に関する研究、さらには

後期の作品にみられる晦渋な文体についての分析などがジェイムズ研究の主流をなしてきたのである。このような研究史のなかで、ジェイムズと視覚芸術との問題に注目した本格的な考察がなされるようになったのは、比較的近年になってからのことだと言える。その先駆的役割を果たしている研究者が Viora Hopkins Winner, Jeffrey Meyers, Adeline R. Tintner らである²⁾。

一方、これら先行研究において、いまだ十分に研究されていない領域があるとすれば、それは視覚芸術とテキストとの内容に深く言及した考察である。そこで、ある状況におかれた主人公の心理や発話と絵画とを関連づける新たな視点から、ジェイムズの作品を検証してみた。その結果、絵画が果たすいくつかの重要な働きが明らかになったのである。その一つは、絵画が主題につながる暗示を与え、饒舌な説明に替わって表現すべき事柄を、より深い次元で直接的に読者に伝える役割を担っていることである。また、ジェイムズは視覚芸術の描写的な特徴を利用して物語を読者の目に見せているとも言える。さらに、これらの働きに留意することによって、テキスト解釈に新たな可能性を導き出すこともできるのである。

本稿では、まず始めにジェイムズと視覚芸術との関係を明らかにした上で、後期の三大長編の一つである *The Wings of the Dove* を例にとって絵画とその役割を検証していきたい。

ジェイムズと視覚芸術との関係

ジェイムズの生涯を概観すれば、視覚芸術との結びつきが運命的であり、視覚芸術についての十分な知識を習得できる環境に恵まれていたという事実が明らかになる。

第一に、ジェイムズの自伝 *A Small Boy and Others* の中に、視覚芸術との運命的な絆を物語るエピソードを求めることができる。ジェイムズ

は1855年から1858年にわたるヨーロッパ滞在中、兄の William と共にルーヴル美術館のアポロンの間を訪れている。当時、まだ少年であったジェイムズは、そこで美の「様式」と出会い、「あたりを満たす栄光の中に美と至高の意匠のみならず歴史や名声や権力」を至福の思いで感受している。のちに、この広間は生涯を通じて彼にとって貴重な役割を果たす場となった³⁾。また、風習 (manners) を描く小説家であるジェイムズが、整然としたパリの街並みを散策しながら、人生の場である現実世界にも美の様式が存在することを認識したのも、このヨーロッパ滞在中であった⁴⁾。小説の構造や形式に対する彼の執着を考慮すれば、ある一定の形を示す「様式」への最初の出会いが造形美術のそれであったことは非常に重要である。このようなジェイムズの経験は、*The Wings of the Dove* の主人公 Milly Theale が、華麗な天井壁画や美術品に彩られたヴェニス邸宅の中で、過去の人々の営みを感じ取る場面に反映されている⁵⁾。

第二に、ジェイムズは芸術家から絵画の知識を直接吸収できる機会を得ていた。彼は、1860年にニューポートで、兄と共に William Morris Hunt のアトリエに通い、後に画家となる John La Farge からも知的刺激を受けている⁶⁾。また、イギリス、そしてヨーロッパにおいても、John Singer Sargent や Sir Edward Burne-Jones らと親交を結んでいた⁷⁾。さらに、*North American Review* の編集長を務め、John Ruskin やラファエロ前派の画家たちをジェイムズに紹介し、生涯の友となる Charles Eliot Norton は、1873年から1898年までハーバード大学で美術史を専門とした教授であった⁸⁾。

このように芸術的な環境に恵まれたジェイムズは、ティントナーが指摘しているように、19世紀後半の美術史の発展や思潮にも敏感であったと推察できる⁹⁾。ヨーロッパにおいて19世紀の後半以降は、西洋美術史における様式研究のおおいなる発展の時期であり、特にイタリア美術の研究はドイツ語圏の美術史家とその中心的役割を果たしていた。ジェイ

ムズは美術界におけるこの情勢を熟知しているかのようには、*The Portrait of a Lady* (1881) の中で「素晴らしい美術の先生」にドイツ人を採用し、*The Golden Bowl* (1904) においてもドイツ人美術家として Grimm を登場させている¹⁰⁾。

また、ジェームズの視覚芸術に関する知識は美術評論の分野においても十分に発揮されている。彼は父親である Henry James, Sr. の勧めもあって、早い時期から美術評論を手がけ、テイントナーによれば、ジェームズが批評した画家は実に350人に及ぶとされている¹¹⁾。例えば、彼自身が編んだ美術評論集 *Picture and Text* (1893) の中で、Sargent や Honoré Daumier をはじめとする芸術家たちについて論じ、イタリア旅行記 *Italian Hours* (1893) においても、数多くの絵画や画家についての言及が見出せる。

以上に述べたことは、ジェームズと視覚芸術とのかかわりの深さ、視覚芸術に対する強い関心、そして美を識別する確かな目と知識を証明している。

象 徴

それでは、視覚芸術がジェームズの作品の中で果たしている役割とはどのようなものなのだろうか。*The Wings of the Dove* におけるストーリーの展開の上での絵画の役割とテキスト解釈について検証していきたい。

この小説においてジェームズは、不治の病におかされたアメリカ娘が、イギリスとヨーロッパでの経験を通じて彼女の遺産を狙う人々の陰謀と裏切りに傷つきながらも、彼らを許し恵みの翼を広げて昇天する姿を描いた。この作品の中で Agnolo Bronzino と Antoine Watteau、ならびに Paolo Veronese によって描かれた絵画は、のちに詳しく述べるように、主人公の運命を予示する重要な役割を果たし「死を直視した人間がいか

に生きるか」という主題をより鮮明に照らし出している。

それら三枚の絵画の中で、中心的役割を担っているものがブロンズイーノによる肖像画である。この肖像画は主人公 Milly Theale を歓迎する宴を描いた第五篇で用いられている。この場面はアメリカからやって来たミリーがロンドンで初めて招かれた公式な社交の場を描いたものである。エスコート役を務める Lord Mark は邸内に彼女に酷似したブロンズイーノの肖像画があると告げる。ジェイムズはこの肖像画を次のように描写して、ミリーの特徴を示す細部までも読者の目に見せている。

... the face of a young woman, all splendidly drawn, down to the hands, and splendidly dressed; a face almost livid in hue, yet handsome in sadness and crowned with a mass of hair, rolled back and high, that must, before fading with time, have had a family resemblance to her own. The lady in question, at all events, with her slightly Michael-angelesque squareness, her eyes of other days, her full lips, her long neck, her recorded jewels, her brocaded and wasted reds, was a very great personage – only unaccompanied by a joy. (I: 220-221)

これらの特徴から、ジェイムズ研究者たちはこの肖像を《ルクレツィア・パンチアティキの像》(Ritratto di Lucrezia Panciatichi) であると指摘している¹²⁾。(図①)

ここで問題となるのは、読者がこの肖像画を特定できたかという点である。これに関して、ごく初期の作品から数々の絵画をテキストに織り込んできたジェイムズは、彼の小説を愛する読者層と彼自身とが美術の趣味を共有していることを認識していたのだと Charles R. Anderson は述べている¹³⁾。確かに、*The Wings of the Dove* が発表された1902年にはジェイムズはすでに流行作家ではなくなっていたことを考慮すれば、彼の難解で曖昧と評される作品を好む読者とは、彼自身が“childish”¹⁴⁾と称

した一般大衆ではなく、そうした知識人たちであっただろうと思われる。また、1901年に発行されたウフィツイ美術館のカタログには、この肖像画が当館に所蔵され、描かれた人物についても Bartolomeo Panciatici の妻となった Lucrezia であることが記載されている¹⁵⁾。したがって、この肖像画に関するジェイズの叙述から、読者がルクレツィアの肖像を探し当てうることは想像するに難くない。

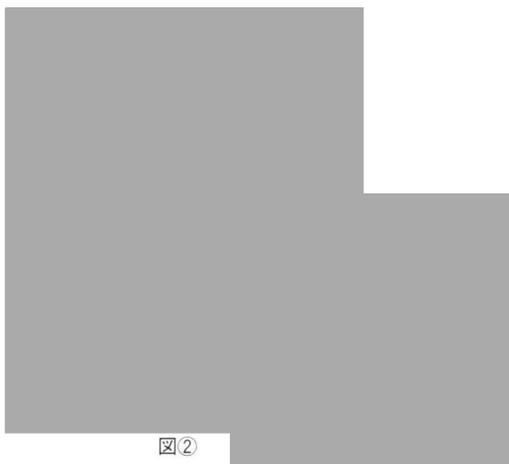
当然のことながら、ジェイズがこの肖像画に描かれた娘に関して何らかの知識を有していたことはマーク卿の言葉 “one doubts if she is good” (I: 222) でも明らかである。史実によれば、ルクレツィアはメディチ家の親類であり、宗教改革に賛同した罪により迫害を受け入獄した経験を持つとされている¹⁶⁾。この点から、ジェイズがこの肖像画に託した一層深い暗示を読み取ることができる。つまり、16世紀の墮落した教会組織とミリーの財産を狙う拝金主義に捕らわれたロンドンの社交界、およびルクレツィアとミリーの酷似という図式から導き出される主人公ミリーの過酷な運命である。

さらに、この場面でミリーは “[the young woman by Bronzino] was dead, dead, dead.” (I: 221) と呟き、この娘の肖像に自身の死の象徴を見て取る。この瞬間、物語を外側から傍観する読者は、あたかも生と死を分かち対峙する二人のミリーが一つの額縁に納められた、もう一枚の絵画を目にすることになる。(図②) つまり、ジェイズは、この肖像画を利用して読者の想像力を喚起し、劇的な一瞬の描写を即時的かつ印象的なイメージへと変容させると同時に、主人公の過酷な運命をも示唆しているのである。

このような効果を狙って、肖像画やある特定のイメージを想起させる芸術家を登場人物と関連づける技法を、ジェイズは小説創作におけるごく初期の時期から用いている。例えば “Four Meetings” (1877) では、主人公 Caroline から全財産を奪い取る従兄は、当時冷酷だと評判の Leon Gérôme の画室に出入りしている¹⁷⁾。したがって、純真な彼女がい



図① ブロンズイーノ 《ルクレツィア・パンチアティキ》1540年頃
フィレンツェ、ウフィツィ美術館
Bronzino: Ritratto di Lucrezia Panciatichi. Galleria degli Uffizi, Firenze.
『世界美術大全集』第15巻 小学館 1998年 p.47



図②

かに彼を信じ、貸した金の返済を待とうとも、芸術家の名前が暗示となって、洞察力ある読者は物語の結末を容易に想像することができるのである。しかし、後期の代表作の一つである *The Wings of the Dove* において、ジェイムズの肖像画の使い方は、別の絵画と連関させることによって新たな意味を創造する点で進化を遂げている。

対 比

これまで述べてきた象徴としての絵画の利用法に加えて、ジェイムズはブロンズイーノとヴァトーの作風の違いを効果的に利用して、主人公ミリーが経験する幸せの絶頂と孤独、束の間の夢と辛い現実を見事に描出し、彼女の運命的な決断にいたる記述をも強化している。

ジェイムズは、第五篇の冒頭つまりブロンズイーノの肖像画とミリーを対峙させる場面に先立って、彼女を Antoine Watteau の世界へと誘っている。アメリカ娘の眼に“the admirable picture” (I: 210) と映ったのは、彼女が初めて訪れたロンドンの社交界である。彼女はこの宴が催されている由緒ある邸宅に「ほとんど法外なまでに壮麗なヴァトーの構図」¹⁸⁾を見て取ったのだ。そしてその額縁の中に入ることを許され、その画布を構成する人々と過ごすひと時は、彼女にとってまさに“an armful of the rarest flowers” (I: 208) だったのである。

ミリーはその館の庭内で、ロンドンにおける友人の Mrs. Lowder や Kate が社交界という青い空を、心ゆくまで泳ぎまわっている様子を眺めている。そして、彼女たちがこの宴に出席できるように口を利いたマーク卿こそはこの世界の住人、まさに“the note of the blue” (I: 213) であると感じる。一方、ラウダー夫人は、長い年月を経て再会したかつての学友 Mrs. Stringham が宴の主賓であるミリーを紹介してくれたことを喜び、アメリカ人は“lavender and pink paper” (I: 215) で包んで人を保管しておくようだと述べる。また、“the palest pinks and blues” (I: 223) の衣装

に身を包んだ Lady Aldershaw はミリーを自邸へ招待したいと申し出る。これらの叙述からも明らかのように、ジェームズは、この宴にヴァトーの描いた背景や貴族達の装いを想起させるブルーやピンクやラベンダーなどの色彩を施している。つまり、ジェームズは自著の美術評論集の中で“the high-water point of natural elegance”¹⁹⁾と評したヴァトーの雅宴画のイメージを用いて、主人公の目を通し彼女の意識に現れた豪華なロンドンの社交界を描き、伝統と芸術に飢えたアメリカ娘が生まれて初めて高度な文化に触れた喜びを見事に描出しているのである。

そしてこの優雅な社交界の外観が繊細な筆致で描かれれば描かれるほど、この世界の内実つまり軽薄で狡猾な一面を感じた時のミリーの醒めた気持ちは大きな落差をもって伝わってくる。ミリーがロココの世界を構成する人々に見出したものは、気品や洗練であると同時に彼らの愛想笑いや慇懃な態度、ならびに舐めるような視線であったからだ。そのため、ミリーはロンドンの社交界における自身の立場を冷静な目で眺めなければならなくなる。このような描写の後で、ジェームズはブロンズイーノの肖像画とミリーを対面させる。

その結果、ミリーが入り込んだヴァトーの世界—貴族たちの社交風景を華麗な色調で描いた雅宴画—と、彼女に酷似したクリスタルのように冷たく能面のように表情に乏しいブロンズイーノの肖像画とが創出する鮮明なコントラストは、ある種の意味を持ち始める。つまり、その不調和な印象はテキスト内容と強固に結びついて、この宴におけるミリーの疎外感と違和感および緊張感を代弁する視覚的イメージとして読者の感情に直接的に訴えてかけてくるのである。

このような対比の技法に加えて、ジェームズ自身がニューヨーク版の序文の中で「最高の趣味を活かすための機会」あるいは「極度の洗練」と称した *The Wings of the Dove* には、より複雑な技法が用いられている²⁰⁾。その技法とは、これまで考察してきたブロンズイーノの肖像画とヴァトーの雅宴画が造りだす構図を用いて、物語の展開と帰結を目に見

える映像として結びつけることである。したがって、第五篇におけるこれら二枚の絵画が担う最も重要な役割は、この場面でミリーが述べた“*I shall die, as if I were alive*” (I: 199) という言葉と物語の大団円で示される結末をつなぐことにある。特にこれは、ティントナーやマイヤーズといったジェイムズ研究者たちによって未だ指摘されていない新しい点と思われる。

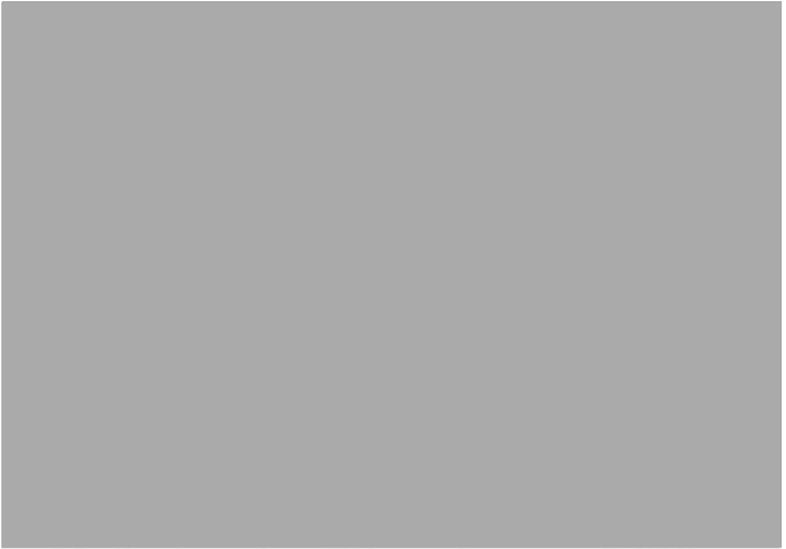
連関する絵画による暗喩

ここで大団円における絵画の役割を検証する前に、ミリーの運命を左右し物語の結末を決定する出来事と絵画との関係を検証してみたい。

第二の転換点である第八篇で、ストリングラム夫人はミリーの主催する晩餐会を“*a Veronese picture*”と見なし、その絵画の中でミリーの想い人 Densher は「盃を掲げ堂々とした若者」であると語っている²¹⁾。この特徴からマイヤーズやティントナーが《カナの婚宴》(*Nozze di Cana*)と特定した祝宴画は主人公の運命と深い関りを持っているのである²²⁾。(図③④)

この問題に関して、マイヤーズはブロンズイーノによる肖像画に描かれた真珠の首飾りとヴェロネーゼの祝宴画に表現された世界をミリーの富の象徴として関連づけながらも、それ以上の考察を行っていない²³⁾。しかし、これまで述べてきたように、この作品における絵画とテキストとの不可分の関係とジェイムズが絵画に託した多重的な暗示とを考慮するとき、より進んだ考察の意義は十分にある。ここで重要なことは、ブロンズイーノの肖像画とヴェロネーゼの祝宴画ならびに晩餐会当日のミリーの装いを、真珠の首飾りという暗号によって結び付けられた一連の絵画と見なし、ヴェロネーゼの祝宴画を構成する細部を見ることである。それによって新たなテキスト解釈が可能になる。

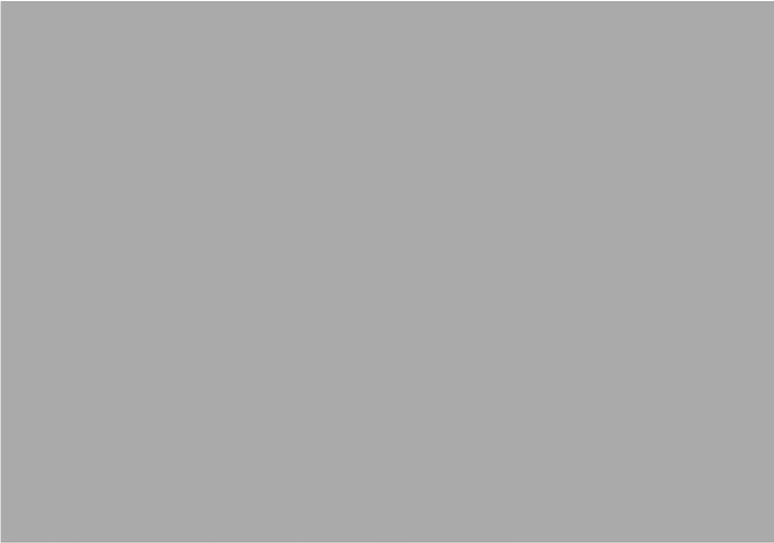
そこで、図⑤に描かれている手前から三番目と四番目の男女に注目し



図③ ヴェロネーゼ 《カナの婚宴》1562-63年 パリ、ルーヴル美術館
Veronese: Nozze di Cana. Musée du Luvre, Paris
〔『世界美術大全集』第13巻 小学館 1998年 p.269〕



図④



図⑤



図⑥

たい。この絵画はヴェロネーゼによる《カナの婚宴》の左端の一部である。そこに、彼らが手前に座る女性の見事な真珠の首飾りに目を奪われている様子が見て取れる。ジェイムズ研究者たちはこの部分に気づいていないようである。つまり、ブロンズイーノの肖像画に描かれている真珠の首飾りは、ヴェロネーゼの祝宴画に描かれた首飾りと結びついて、主人公の財産を狙う陰謀の存在を暴露し、目に見える告発となっているのである。作者はこれを言葉で記すのではなく、絵画の内容と読者の知性に裏打ちされた想像力に託して視覚的に表現しているのである。したがって、ミリーの主催する晩餐会をヴェロネーゼの祝宴画と見なしたストリングラム夫人の真意は、行文には記されずとも、デンチャーの行動に対する牽制であろうというテキスト解釈が可能になる。

このように、絵画を通して予示されたケイトとデンチャーの陰謀は後に現実のものとなる。晩餐会当日、ケイトはミリーの胸元を飾る真珠の首飾りを指し示し、デンチャーに対して“Everything suits her so – especially her pearls . . . I’ll trouble you really to look at them.” (II: 217) と述べ、二人はそれを凝視しながらミリーの財産を奪う計画を実行に移す取り決めをするからである。

このように、第五篇におかれたルクレツィアの首飾りは、第八篇でヴェロネーゼの祝宴画を構成する貴婦人の胸に掛けられ、ついには額縁から抜け出して、この小説の主人公の首に掛けられたのである。換言すれば、この場面でミリーは視覚芸術の構成要素となり、視覚芸術は関連する一組の絵画となって言語芸術の継起性を手に入れたとも言える。

また、本来、キリストが水をワインに変えたという聖なる奇跡が主題であるはずの画布に、物欲に捕らわれた人々を描きこんだヴェロネーゼの祝宴画に託して、ジェイムズが後に高德な行ないによってデンチャーを改心させたミリーを救世主に擬え、彼女を取り巻く世俗の人々の本質を読者の目に見せているのだとも考えられる。ここに、視覚芸術と言語芸術の融合を可能にしたジェイムズの巧緻な技法の一端を見ることがで

きる。

入れ子構造とテキスト解釈

最後に、ケイトとデンシャーの陰謀とミリーの生への模索とが精妙に結びついている物語の結末と、絵画との関係について検証していきたい。

The Wings of the Dove は、ミリーの遺産譲渡書とおぼしき封筒を前にして、彼女との思い出に捕らわれたデンシャーをケイトがなじる場面で結ばれている。一方、主人公のミリーは、この小説の中盤以降、病状の悪化を理由に物語の前面から姿を消してしまい、彼女の相談役であるストリングラム夫人の視点を通して間接的に語られるのみで最後まで登場することはない。そのため、ミリーがロンドンの社交界でどのように生きたのか、あるいは「生きているように死にたい」というミリーの願いをジェームズが物語の結末でどのように示しているか、という問題が残るのである。

しかし、新たなる観点に立てば、つまり、ロンドンの社交界を表すヴァターの雅宴画とミリーに酷似したブロンズイーノの肖像画が構成する入れ子構造に着目すれば、ジェームズがこの二つの絵画に託したミリーの最後の姿は読者の目にも明らかであろう。

第五篇で述べたように、ジェームズはミリーに酷似したブロンズイーノの肖像画がヴァターの絵画を思わせる邸宅の一室にあると記している。第一に、この入れ子構造をなす二枚の絵画は、アメリカ娘のミリーがロンドンの社会の中に入り込んだことを示唆している。それは、ミリーがケイトの話から知識を得て、ロンドンの社交界の風習である give-and-take の規則に従い世俗の財を捧げ、その見返りとしてデンシャーの心を獲得したと推察できるからである²⁴⁾。

一方、この出来事の詳細をケイトの立場から述べるとすれば、以下の

ようになる。ブロンズイーノの肖像画の前で、ケイトは病身のミリーから死ぬまで病気を隠し通すための手助けを求められる。このときケイトは“... if there's anything to bear you'll bear it.” (I: 229) というミリーの言葉を聞いて“*But I won't bear it.*” (I: 229) と述べ、彼女の依頼を一度は拒絶する。しかし、ミリーからなれば強引にその約束をさせられてしまう。その結果、この契約はミリーの死の象徴であるルクレツィアが立会人となって成立し、ミリーとの美しい思い出に恋人のデンシャーを奪われるという辛い現実にはケイトは耐えなければならない。したがって、ケイトはその対価としてミリーの遺産を譲り受ける権利を有するのである。

第二に、ブロンズイーノの肖像画はこのような俗なる取引にもかかわらず、ミリーが真実の愛によってイギリス人であるデンシャーの心の中にも入り込んだという解釈をも可能にしている。その鍵を握るものはルクレツィアの首に掛けられたもう一つの首飾りである。ティントナーやマイヤーズによって指摘されているように、その金の鎖をつなぐプレートには、永遠の愛を意味する“*Amour Dure Sans Fin*”という文字が彫り込まれているからである²⁵⁾。(図⑥)

さらに、「生きているように死にたい」というミリーの希望どおり、彼女が病んだ姿をデンシャーに見せずに亡くなったことを考慮すれば、血の気のないルクレツィアの肖像は、ミリーのあたたかな微笑みに姿を変えて、デンシャーの記憶の中で「生きている」と想像できる。つまり、彼女の死の象徴たるルクレツィア肖像は、最終章で彼女の生の象徴に転化されているのである。

このように、ジェイズは連関する絵画に託して、陰謀の犠牲になり死に逝くミリーの姿ではなく、永遠に生き続ける彼女の姿を読者の目にみせている。したがって、たとえミリーの姿は描かれずとも、物語の結びに記された“*Her memory's your love. You want no other.*” (II: 404) というデンシャーに向けられたケイトの言葉の背後に、「永遠の生を勝ち得たミリーの姿」を読者は鮮明にイメージすることができるのである。

これまで絵画とテキストとを連関させる新しい観点からのテキスト解釈を試みてきた。それから得た結果は、マイヤーズが指摘した *The Wings of the Dove* の主題とは異なるものである。彼はヴェロネーゼの祝宴画の解釈を論拠として、それを「精神性に対する物質主義の勝利」であると述べている²⁶⁾。しかし、ヴァトーの雅宴画に納められたブロンズイーノの肖像画のごとく、デンチャーの思い出の中に高々と掲げられたミリーの生き生きとした肖像を想起する時、この物語の主題は物質主義に対する精神愛の勝利と解釈できるのである。

結 び

以上のように、ジェイムズは *The Wings of the Dove* において、視覚芸術を利用して、物語の転換点における劇的な一瞬を即時的かつ印象的な場面として描出している。また、絵画は冗長な説明に替わって表現すべき事柄をより深い次元で直接的に読者に伝え、小説に深みと広がりを持たせることによって、彼の「語らずして語る」小説を完成させる重要な役割を担っているのである。同時に、絵画の暗喩的使用による読者の過剰なイマジネーションの広がりを記述によって制限することで、視覚イメージと言語との理想的な相乗効果を引き出しているとも言える。

さらに、連関するブロンズイーノとヴァトーならびにヴェロネーゼの三枚の絵画は、この小説の主題を鮮やかに照らし出し、物語の展開に巧緻に絡み合い一筋の流れとなって大団円に到達するというように、テキストと不可分の要素を構成している。その意味では、ジェイムズは彼の小説をより深く理解したいと望む読者に、彼と同様の趣味とそれに関する知識を要求しているのである。

ジェイムズは絵画と文学との相補性について、“the analogy between the art of the painter and the art of the novelist is, so far as I am able to see, complete They may learn from each other, they may explain and sustain

each other.²⁷⁾と述べている。これに関連してマイヤーズは、“In *The Wings of the Dove* . . . James frequently attempts to make the reader see by imitating the representational characteristics of the pictorial arts, and by ‘composing, as painters call it’ the complex elements of his novel.”²⁸⁾と述べ、美術作品と登場人物たちを関連づけるジェームズの技法の重要性を指摘している。

このようなジェームズの主張とマイヤーズの指摘は、*The Wings of the Dove* の中で見事に実証されている。つまり、この作品には視覚芸術を単なる象徴として使用するにとどまらず、言語芸術と視覚芸術の織り成す融合芸術を追求したジェームズの姿勢が示されているのである。

註

- 1) F. O. Matthiessen, *Henry James: The Major Phase*, 65. ジェームズが著しい成功を収めたイメージの型は、造形美術に関する知識を十分に利用した種類のものであることを、マシーセンは指摘している。
- 2) Viola Hopkins Winner, *Henry James and the Visual Arts*, 1970; Jeffrey Meyers, *Painting and the Novel*, 1975; Adeline R. Tintner, *The Museum World of Henry James*, 1986;———, *Henry James and the Lust of the Eyes*, 1993. マイヤーズは視覚芸術と文学の相補性という視点から作品に使用されている絵画を分析し、ウィナーやティントナーは短編から長編にいたる数多くの作品を研究対象として、ジェームズと視覚芸術との関係や作品における使用法などを解明している。
- 3) Henry James, *Autobiography*, 196.
- 4) Henry James, *Autobiography*, 191. ジェームズはパリの家並みが“Art, art, art, don't you see? Learn, little gaping pilgrims, what that is!”と告げているようであったと述べている。また、ツールノン通りの古い家々に“style”を感じ、それらが“Yes, small staring jeune homme, we are dignity and memory and measure, we are conscience and proportion and taste”と言いたげな様子であったと回想している。
- 5) Henry James, *The Wings of the Dove* (1902), Tokyo: Hon- no-Tomosha, 1997, II, 174; “. . . she [Milly] insisted that her palace - with all its romance and art and history - had set up round her a whirlwind of suggestion that never dropped for an hour. It wasn't therefore, within such walls, confinement, it was the freedom of all centuries. . . .”以下、このテキストからの引用は本文中に巻数と頁数のみ

を記すこととする。

- 6) Henry James, *Autobiography*, 257 - 276, 284 - 300.
- 7) Leon Edel, ed. *Henry James: A Life*, 95, 301 - 303, 684 - 686.
- 8) Robert L. Gale, ed. *Henry James Encyclopedia*, 465 - 467.
- 9) Adeline R. Tintner, *The Museum World of Henry James*, 3.
- 10) Henry James, *The Portrait of a Lady*, I, 330; ———, *The Golden Bowl*, I, 150.
- 11) Adeline R. Tintner, *The Museum World of Henry James*, 1.
- 12) Adeline R. Tintner, *Henry James and the Lust of the Eyes*, 95; Viola Hopkins Winner, *Henry James and the Visual Arts*, 83; Jeffrey Meyers, *Painting and the Novel*, 19. ジェイムズが Bronzino によって描かれた《ルクレツィア・パンチアティキ》を用いたことを最初に指摘した文献として、いずれの研究者も Miriam Allott, “The Bronzino Portrait in *The Wings of the Dove*,” *Modern Language Note*, LXVIII (Jan., 1953), 23-25. を註記している。
- 13) Charles R. Anderson, *Person, Place, and Thing in Henry James's Novels*, 187.
- 14) See Henry James, Letter to William Dean Howells (December 11, 1902), *Henry James: Letters*, IV, 250. この手紙の中でジェイムズはハウエルズに対して一般大衆を “a public more than usually childish” と評し、以下のように述べている。“I confess . . . that that is my chronic sense - the more than usual childishness of public: and it is (has been,) in my mind, long since discounted, and my work definitely insists upon being independent of such phantasms and on unfolding itself wholly from its own “innards.”
- 15) *Catalogue of the Royal Uffizi Gallery in Florence*, 195.
- 16) ジュリオ・カルロ・アルガン『新篇ウフィーツィ美術館』140頁
- 17) Henry James, *The Painter's Eye*, 51. ジェイムズは *Atlantic Monthly* (1872年四月号) に匿名で発表した評論の中で、東方の奴隷を描いたジェロームの主題の扱いが残酷だと評した P. G. Harmerton の見解に賛意を示している。
- 18) Henry James, *The Wings of the Dove*, I, 208; “The great historic house had, for Milly, beyond terrace and garden, as the center of an almost extravagantly grand Watteau-composition”
- 19) Henry James, *The Painter's Eye*, 76.
- 20) Henry James, Preface to *The Wings of the Dove*, I, xxii - xxiii.
- 21) Henry James, *The Wings of the Dove*, II, 206 - 207; “It's [the party for Milly is] a Veronese picture, as near as can be - with me [Mrs. Stringham] as the inevitable dwarf, the small blackamoor, put into a corner of the foreground for effect. If I only had a hawk or a hound or something of that sort I should do the scene more honour. The old housekeeper, the woman in charge here, has a big red cockatoo that I might borrow and perch on my thumb for the evening You'll [Densher

- will] be the grand young man who surpasses the others and holds up his head and the wine-cup.”
- 22) Adeline R. Tintner, *Henry James and the Lust of the Eyes*, 101; Jeffrey Meyers, *Painting and the Novel*, 25-26.
- 23) Jeffrey Meyers, *Painting and the Novel*, 27.
- 24) Henry James, *The Wings of the Dove*, I, 179.
- 25) Adeline R. Tintner, *Henry James and the Lust of the Eyes*, 97; Jeffrey Meyers, *Painting and the Novel*, 24.
- 26) Jeffrey Meyers, *Painting and the Novel*, 29.
- 27) Henry James, “The Art of Fiction,” *Partial Portraits*, 378.
- 28) Jeffrey Meyers, *Painting and the Novel*, 20.

参考文献

< Primary Sources >

- James, Henry. *The Ambassadors*. 2 vols. 1903. Tokyo: Hon-no-Tomoshia, 1997.
- . “The Art of Fiction,” *Partial Portraits*. Michigan: The University of Michigan Press, 1970. 375 - 408.
- . *The Art of the Novel : Critical Preface*. Ed. R. P. Blackmur. New York: Charles Scribner’s Sons, 1934.
- . *Autobiography*. Ed. F. W. Depee. London: W. H. Allen, 1956.
- . *The Complete Notebooks of Henry James*. Ed. Leon Edel and Lyall H. Powers. New York: Oxford University Press, 1987.
- . “Four Meetings,” 1877. *Henry James: Complete Stories*. New York: The Library of America, 1999. 191 - 218.
- . *The Golden Bowl*. 2 vols. 1904. Tokyo: Hon-no-Tomoshia, 1997.
- . *Italian Hours*. Ed. John Auchard. Pennsylvania: The Pennsylvania State University Press, 1992.
- . “To W. D. Williams.” 11 December 1902. *Henry James: Letters*. Ed. Leon Edel. Vol. 4. New York: Octagon Books, 1970. 250.
- . *The Painter’s Eye*. Ed. Susan M. Griffin. Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1989.
- . *Picture and Text*. New York: Harper, 1893.
- . *The Portrait of a Lady*. 2 vols. 1881. Tokyo: Hon-no-Tomoshia, 1997.
- . *Tales of Henry James*. Ed. Christof Wegelin. New York: W. W. Norton & Company, 1984.
- . *The Wings of the Dove*. 2 vols. 1902. Tokyo: Hon- no-Tomoshia, 1997.

< Secondary Sources >

- Anderson, Charles R. *Person, Place, and Thing in Henry James's Novels*. Durham: Duke University Press, 1977.
- Beach, Joseph Warren. *The Method of Henry James*. Philadelphia: Albert Saifer, 1954.
- Cargill, Oscar. *The Novels of Henry James*. New York: The Macmillan Co., 1961.
- Crews, Frederick C. *The Tragedy of Manners: Moral Drama in the Later Novels of Henry James*. New Haven: Yale University Press, 1957.
- Edel, Leon. ed. *Henry James: A Life*. New York: Harper & Row, 1985.
- Gale, Robert L., ed. *Henry James Encyclopedia*. New York: Greenwood Press, 1989.
- Gombrich, E. H. *The Image and the Eye*. Oxford: Phaidon Press, 1982.
- Heaton, Charles. *A Concise History of Painting*. Rev. ed. Cosmo Monkhouse. London: George Bell & Sons, 1893.
- Lubbock, Percy. *The Craft of Fiction*. London: Macmillan & Co., 1921.
- Matthiessen, F. O. *Henry James: The Major Phase*. London: Oxford University Press, 1946.
- McCorquodale, Charles. *Bronzino*. London: Jupiter Books, 1981.
- Meyers, Jeffrey. *Painting and the Novel*. Manchester: Manchester University Press, 1975.
- Tintner, Adeline R. *The Museum World of Henry James*. Michigan: UMI Research Press, 1986.
- . *Henry James and the Lust of the Eyes*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1993.
- Winner, Viola Hopkins. *Henry James and the Visual Arts*. Charlottesville: The University Press of Virginia, 1970.
- Catalogue of the Royal Uffizi Gallery in Florence. Florence: Cooperative Press, 1901.
- アド・ド・フリース著 山下主一郎訳『イメージ・シンボル事典』東京：大修館書店 1990年
- ワード・クルターマン著 勝 國興・高坂一治訳『美術史学の歴史』東京：中央公論美術出版 1996年
- 黒江光彦監修『西洋絵画作品名辞典』東京：三省堂 1994年
- 佐々木英也監修『オックスフォード西洋美術事典』東京：講談社 1989年
- ジュリオ・カルロ・アルガン他著 望月一文訳『新編ウフィーツィ美術館』東京：岩崎書店 1997年
- 高橋裕子著『世紀末の赤毛連盟』東京：岩波書店 1996年
- 谷口陸男編『ヘンリー・ジェイムズ』東京：研究社 1967年
- 佐々木英也・森田義之責任編集『世界美術大全集』第13巻 東京：小学館 1998年

森陽子・若桑みどり責任編集『世界美術大全集』第15巻 東京：小学館 1998年
坂本満責任編集『世界美術大全集』第18巻 東京：小学館 1998年

付記

本稿は、2003年度学習院大学英文学会における口頭発表の内容をもとに加筆・訂正を施したものである。

Henry James and Visual Arts: A Case of *The Wings of the Dove*

YAMAGUCHI, Shinobu

Henry James weaves many pictures and artists into the textures of his works. He was well versed in visual arts and able to make effective use of them. He thought that the art of the novelist and the art of the painter had many characteristics in common.

Recently, several James scholars have been studying this area and several interesting studies of their research have been published. However, it seems that they reach insufficient conclusions to the argument regarding the connection of text with visual arts and the purpose of art in James' fiction. This paper attempts to fill this void by examining the roles of the following artists' works in *The Wings of the Dove*: Bronzino, Watteau and Veronese.

The results of this study show that their works play significant roles in providing readers with visible illustrations of the subject of the fiction and convey directly and adequately what the author wanted to do instead of using tedious descriptions. They add the charm of artistic depth and vivid impressions. This study also shows that it is possible to make new text interpretations about the text of this novel.

(人文科学研究科イギリス文学専攻 博士後期課程2年)